



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am（「朝の祈り」に続いて）
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



信仰と生活の乖離

主任司祭 小西 広志 神父

森一弘司教さまが帰天なさった。ちょうど思い出したことがあるので初老の神父の昔話として少しお付き合い願いたい。それは「信仰と生活が乖離している」という司教さまの主張である。

第二バチカン公会議が終わったのが1965年であった。新しい風を教会は感じ始めた。その風に後押しされるように東京大司教区は教区大会を1970年に開催した。七つの項目について話し合い、意見を交換した。こうして、第二バチカン公会議による教会の刷新は具体的に始まっていった。高度経済成長期の終焉を迎えた70年代は「モーレツからビューティフル」などと言われて生活のスタイルと「こころ」のあり方が問われていた時代である。一司祭であった森司教さまはカルメル会という修道院を出て東京教区へと移られた。哀しむ人や苦しむ人との出会いが修道生活から牧者の生活へと向かうきっかけになったという。そして多くの方々にかわり、多くの方々に福音を伝え、多くの方々に洗礼へと導いた。80年代の中盤に東京大司教区の補佐司教に任命された森司教さまは、今までの日本の牧者たちとは少し違う視点から務めを果たしておられた。

「信仰と生活が乖離している」とおっしゃったのは森司教さまだったように覚えている。つまり、日曜日にはミサに来て立派な信者として祈り、ご聖体をいただいていくが、他の曜日はイエスさまのことを忘れ、あまつさえ神さまのことを忘れて生きている。信じることと生きることがバラバラであるという主張であった。確かに第二バチカン公会議後「信徒の教会」というかけ声のもとに信徒が教会の運営や社会に存在する様々な問題に取り組んできた。そして、聖職者や修道者は奉仕者として位置づけられ、信仰の共同体に奉仕し、社会に奉仕するものとなった。しかし、キリスト信者一人ひとりの生活は主イエス・キリストの福音とは無関係なところがあったかもしれない。時あたかもバブル経済の絶頂期である。「こころ」のあり方が大切だとは分かっているが、生活を基礎づけるのはモノとお金であるという価値観が一般的なそんな時代であった。「信仰と生活の乖離」が生じないようにしなければならない。そのためには神のみ言葉である聖書を味わう。そして共同体で支え合っていくキリスト者の生き方を森司教さまは提唱していた。福音宣教推進全国会議（NICE-1）もそのような背景から生まれたものだろうと筆者は考えている。

森司教さまは特に小教区共同体になじめないような人びとへの関わりを大切になさった。そのお一人おひとりに真摯に関わった。生活の悩みや苦しみに耳を傾け、励ましを与え、力づけた。このような牧者としてのスタンスは最期まで貫き通された。こうして司教さまを通じて洗礼の恵みをいただいた人びとは数多くいる。

「信仰と生活の乖離」が再び生じているように感じる。どのように乖離しているかを描写するのは難しい。ただ、なんとなく2020年からのいわゆる「コロナ禍」のおかげで信仰に根づいて生きていくという姿勢が少しゆるぎ始めているように思う。自分の都合で教会に來たり來なかつたりを決定できるように考えている方々は多いような気がする。また、若い世代は日々の生活に追われて日曜日にミサに出席するのも難しくなっている。高齢の家族の介護と介助のために教会共同体に來られない人も増えている。この半世紀、70年代以降から取り組んできたような信仰の共同体のあり方では対応できないほど、事態は深刻さを深めているように思う。

高位聖職者である森司教さまの魅力とアピールによって「信仰と生活の乖離」は回避できた。しかし、これからはわたしたちキリスト信者一人ひとりの取り組みが求められている。それは決して個人的になされるのではない。「ともに歩む」という立場から一緒に取り組んでいかなければならないだろう。こうしてわたしたちの東京大司教区は少しずつ「シノドス的」な教会へと変わっていくのだと信じている。

・・・

以上は『東京教区ニュース』に掲載した文章である。誌面の都合上、少し説明が足りない文章となった。果たして「信仰と生活の乖離」について読者の皆さんに伝わったかどうか、はなはだ疑わしい。

森司教さまが主張なさっていた「信仰と生活の乖離」は、「信仰に生活が追いついていない」という意味だったと考える。しかし、現在、わたしたちが直面しているのは「生活に信仰が着いて行けない」かもしれない。多様化した価値観を生きる現代人にとって、「生きる」ことを選び取るのは「わたし」自身である。つまり、「わたし」が神さまの代わりをしている。すべては「わたし」の好き嫌いで決まる。「わたし」の気分次第で決まる。「わたし」の頑張り次第で生活が決まる。すべての中心に「わたし」がいる。あるいは「おカネとモノを使うわたし」がいる。神さまはどこかに行ってしまった。

「信仰と生活の乖離」は結局のところ、「信仰も生活もばらばら」ということではなからうか。司祭とて、修道者とて、このような危機的な状況からは逃れられない。いや、敬虔そうに見えるが、実のところ信仰にも基づく祈りもなければ、信仰に基づく生き方もない。と、言ったら批判を受けるだろう。

「こころを込めて、神を仰ぎ、賛美と感謝をささげましょう」という尊い大切な信仰の務めと生活を、わたしたちは忘れてしまっているのかもしれない。